

◆第4話◆ 赤ペンと校正——校正 畏るべし

表題に「校正 畏るべし」という出版印刷業界の格言をサブタイトルとした。これは、意外と制作作業における落とし穴かな、と考えたからである。

「校正」とは、印刷物を制作する上で、必ず必要となるものである。印刷工場に依頼して出来上がった校正刷り（試し刷り）と原稿を照らし合わせることで内容の正確を喫作業のことである。テキストデータを提供した場合も組版システム上の変換作業が行われる。このため、誤変換の有無を確認する校正が必要である。

校正の原則は、何か。

校正の原則は、「原稿に忠実に従い、校正者が勝手に朱入れをしない」ということである。昔むかし、入稿する原稿は、完全原稿とされ、誤りは、工場の組み付け段階で発生するものという考えがあったところに出発点がある。

まず、「校正」作業は、どのようにして進めるのか、ということである。それは、校正刷りが業者（印刷工場）から届いた直後に何をすべきかから始まる。

業者は、内校（うちこう）といって、社内校正をした上で校正刷りを提出するのが通例であるが、そうでないところもあるので要注意と申し上げる。受け付けた校正刷りには、通し番号を打刻すると後々に役に立つので、まずは提案するものである。

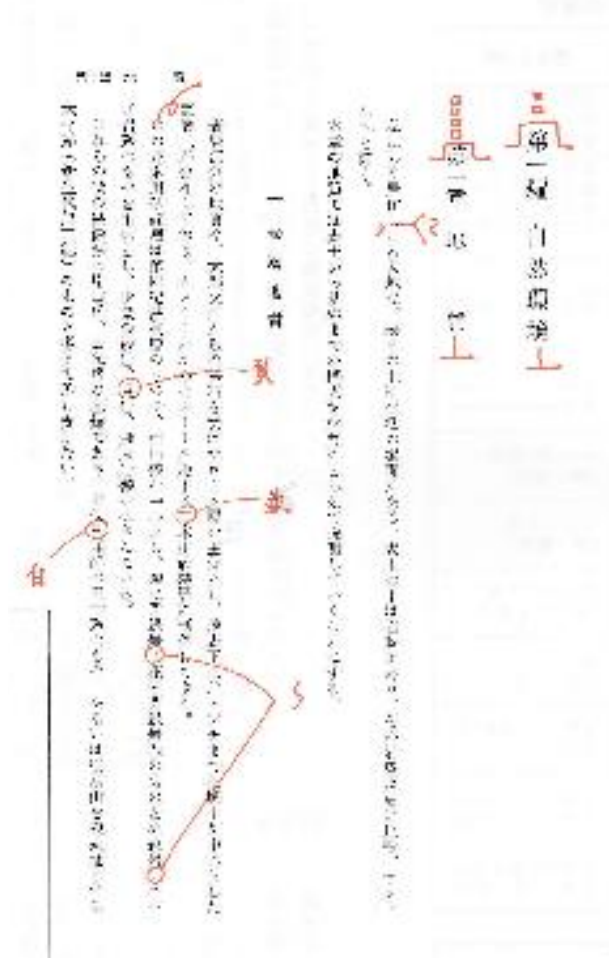
出版社の校正部署では、校正刷りを8～16ページ程度をひとつの「括^{かつ}」として各校正員に分配、振り分けをする。その括は、文章が途中で途切れていることが多いので、連続する前後の校正員と連携しつつ、かつ、自分の担当分の校正が出来たら別の校正員が校正した括と交換して、すべての括が2人ないし3人の校正員の作業を経て原型に復される。

この作業は、原則として突合（原稿の文字と校正刷りの文字とを原稿を1行1行折りながら照合）する方法で行われる。原稿と校正刷りを横に並べて両の指で指示しながら確認する方法もある。これを工場の

校正記号表

表1. 主記号及びその意味

| 番号 | 記号 | 意味 | 印刷上の表示 | 校正時の注意 | 校正後の表示 |
|------|----|----|--------|--------------------|--------|
| 1.1 | ○ | 挿入 | ○ | 挿入した文字は、原稿の行幅に合わせる | ○ |
| 1.2 | △ | 削除 | △ | 削除した文字は、原稿の行幅に合わせる | △ |
| 1.3 | □ | 移動 | □ | 移動した文字は、原稿の行幅に合わせる | □ |
| 1.4 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |
| 1.5 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |
| 1.6 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |
| 1.7 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |
| 1.8 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |
| 1.9 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |
| 1.10 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |
| 1.11 | ◇ | 訂正 | ◇ | 訂正した文字は、原稿の行幅に合わせる | ◇ |



プリプリント（組版）のラインに戻して書き込まれた赤字のとおり訂正する、その確認は、前述の作業を繰り返すことで行われる。

著者校正或いは編纂室での校正は、この次の作業となるのが一般的である。

著者の校正作業は、出版社や印刷工場の校正者と同じく原稿と校正刷の文言が一致しているかという確認作業から始まる。不一致を発見したら、校正刷中の誤字を赤色インク（赤鉛筆）で正しく書き直すのだ。ここで、書き間違えたら遣り直しである。だから、校正を行った後、日付と名前を各人が記録する習慣を身に付けると良い。2回目以降の校正段階や、製品になって誤りが発見された時などに問題解決の手がかりとなる。校正者は、校正記号を頭に入れていと出版印刷業者と円滑に作業進行ができる。

次いで、刷り位置（版面の位置）が原稿指定どおりになっているかどうかについて定規（スケール）を使って確認する。また、柱や丁付（「ノンブル」ともいう）の位置確認も併せて行う。

校正は、事前の約束（契約）により、3回実施するとしていた場合に初校戻しに当たって「要再校」と記さないことが多い。注意喚起や覚えという意味では、「要再校」や「要三校」と1ページ目（最初のページ）の目立つ余白に朱書きの上、校正戻しすることをお勧めする。

「校正 畏るべし」は、どういうことか。

『校正の研究』（大阪毎日新聞社校正部編）という書籍がある。1928年刊のこの書籍は、「校正」について実に詳細に分析、理論づけた大書である。

この中で、孔子の論語子罕篇から引用して、

『子曰後生可畏 焉知來者之不如今也 四五十而無聞焉 斯亦不足畏也已』の一節がある。注にいはく、『後生は少年なり。年富み力強し。もつて學を積んで待つあるに足る。その勢畏るべし』と。——『校正畏るべし』といふ福地氏の痛罵は、このくだりをもどつたもので、『勇敢』な校正者に對する頂門の一針である。この言葉は、今日もまだ、ときどき口にせられ、校正者を恐縮させてゐる。

とあり、つまり福地源一郎²が「校正 畏るべし」と言ったのだそうだ。

原稿の浄書、校正の疎漏が著者の憤りを買っていた時代のことである。つまり、この格言は、かつて原稿を手書きで執筆していた時代に、達筆すぎるか又は癖字であるため、印刷工場の文選担当者の便に供することを意図して編集者及びそれを生業とする者がリライトという作業をして、聞き書きで書き間違えたり、リライト後に確認を怠ったり、組み上がった校正刷を確認する校正者の段階でも原著に当たることをしないで仕上がった製品が著者の意図に合致しない製品になるという事態があった。こういうところから生まれた格言といえ

² [生]天保12(1841).3.23. 長崎～[没]1906.1.4. 東京

新聞記者、政治家、劇作家。号は桜痴。1874年12月「東京日日新聞」に入社し、1876年社長に就任。明治政府の方針を反映した署名入りの社説は言論界、実業界、政界に影響力をもった。

出典：ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典

る。

実際、自分が原稿を書き下してみれば、よくわかることであるが、形が変わることで考えも変わる。だから、組み上がった校正刷りを見ると、直したくなるのだ。これは、文書校正機たるワードプロセッサ（ワープロソフトも同じ）の普及が多分に作用している。作者は、手元で労せずして文章の手直しが可能になり、大した推敲もせずに、脱稿を企て、後々修正を加えるようになる。ワードプロセッサでは、簡単な作業と考えられるからである。校正の繰り返しにより未完成原稿を完成型に持っていく手法が、現代のやり方の主流になった。

つまり、原稿にこだわりがなくなる。それは、誤植、類義語の見逃しにつながる。1箇所直せば、それに関連する箇所が必ずあるもので、関連箇所に気づかないとそのまま間違い（誤植）ということになる。正誤表なのか、訂正シールなのかはたまた切り替えしなどという大ごとになるのか、もっと悪い程度であれば作り替えもあるが、気忙しい、かつ、気の重い仕事が待っているのだ。筆者は、『拓殖大学百年史』の索引原稿を中途半端にしたことで、危うく作り替えの危機に直面した経験がある。索引原稿には、必ず読み仮名を記入しなければならない。忘れることが致命傷となる。三校の校正刷りを工場に戻したところで、不安になり、改めて3度見直してようやく気が付いた。寸でのところで、救われたのが、昨年（平成29年）末のことである。何度見ても、何度見直しても頭の中で、アレンジしていることがある。ああ畏ろしや恐ろしや、校正の基本は、自分自身を疑うことにありということであろうか。